

関川 竹四（せきかわ・たけし）

1、プロフィール

元八戸俳借倶楽部会長。第 17 世星霜庵。俳人協会々員。俳誌「濱」同人。俳誌「青嶺」初代同人会長。八戸市功労賞、八戸市文化賞授賞。

<生没>

1925(大正 14)年1月 20 日～2003(平成 15)年6月 21 日

<代表作>

『句集 青やませ』

青やませ身を揉んで彳(た)つ朴一樹

鶏も出て峡の一戸の秋祭

<青森との関わり>

八戸市湊町上ノ山に居をかまえ、八戸市役所に勤務。いわば生粋の八戸っ子であった。

2、作家解説

本名竹三。昭和 43 年、俳誌「青嶺」主宰木附沢麦青に師事。それまでは短歌に打ち込んでいたが、俳句の魅力に取り付かれ門をくぐった。

同 44 年、八戸俳句会(北鈴)に入会。同 45 年には、麦青の師でもある大野林火主宰の「濱」に入会、本格的に俳人の道を歩み始めた。同 50 年、八戸俳借倶楽部に入会、星々庵と号す。

平成2年には同会々長の座に推され第 17 世星霜庵を嗣号。平成 15 年5月、八戸俳借倶楽部創立百周年記念事業の終了を見届け、同年6月 21 日に逝去した。

句集に『青やませ』、『北辺』、編著に『八戸の俳借』、また『八戸俳壇の歩み』がある。

3、資料紹介

○『句集 青やませ』

図書

1982(昭和 57)年8月 20 日

195mm×135mm

第一句集。序文は、「濱」主宰の大野林火。八戸風土を中心とした地方性豊かな句集。当時、岩手県北部から青森県南部にかけていわゆる風土俳句が流行。角川俳句賞受賞者を数人輩出したが、掲句集もその傾向を帯びる。地味だが重厚な風土精神が特徴。